中学生の親子のコミュニケーションの実態と背景
—中学校技術・家庭の新設「家庭生活」領域の「家族の生活」の題材設定に向けて—

上野顕子*・鈴木敏子**

Facts and Background Factors of Communication between Junior High School Students and Their Parents

Akiko UENO・Toshiko SUZUKI

目　的

中学校で1993年度から実施されている1989年改訂学習指導要領では，技術・家庭に「家庭生活」領域が新設され，男女共通履修の領域とされた。この領域には「(1)家族の生活」という指導項目がおかれ，「ア　家庭の機能と家庭生活の意義を知ること」「イ　家族の生活と家族関係について考えること」という内容が示された。1958年告示の中学校学習指導要領で，教科名が職業・家庭から技術・家庭に変化して以来，このような「家族」に関する領域や内容が登場したのははじめてのことであることから，これは，今回改訂の学習指導要領の特徴であると評価される一方，どう実践したらよいか不安であるという教師も多い[1]。その場合，「家族」の内容は，家族から自立しようとしている第二次性徴期にある中学生に受け入れられるだろうか，子どもたちの家族は様々であるから扱いにくい，といったような理由があげられる。中学生という発達段階と，家族の現状に照らして，「家族」についてどのような題材を設定し，どう教授したらよいか，ということなどが課題になっているのである。

そこで，中学校技術・家庭の新しい内容である「家族の生活」を展開するにあたって，中学生の家族のとらえ方について把握しておくことが必要ではないかと考え，親子のコミュニケーションの実態や意識から，中学生の親子関係の特徴を明らかにし，「家族の生活」の題材設定の方向を探ってみることにした。

方　法

1．調査時期及び調査対象

調査時期は，1990年11月である。

＊清泉女学院中学高等学校教諭
＊＊横浜国立大学教育学部

調査対象は，「家庭生活」領域の履修学年とされている中学1年生で，横浜国立大学附属鎌倉中学校1年生4クラス174名に調査を依頼した。そのうち有効な回答が得られた170名を分析した。

2．調査方法及び調査内容

次のような内容の質問紙による集合調査を行った。

① 子どもは親を自分の理解者としてとらえているか。

② 親子の相互理解のために，子どもは親とどの程度コミュニケーションをとることを望んでいるか。

③ 実際はどのような親子のコミュニケーションをしているか。

④ そのようなコミュニケーションに影響を与えている要因は何か。

調査の結果行っている検定は χ^2 検定である。

調査の結果及び考察

1．家族の主な属性

家族構成は，核家族が71.8%，拡大家族が27.6%であった。平均同居家族人数は4.6人で，1990年の神奈川県の18歳未満の親族のいる世帯の一世帯当たりの世帯人員，4.12人[2)]と比べて多くなっている。平均きょうだい人数は2.1人で，これも神奈川県の18歳未満の親族のいる世帯の一世帯当たりの18歳未満の親族人数1.73人[2)]よりも多い。父親は，80.6%が雇用者であった。母親は，54.1%が無職で，44.1%は何らかの職業を持っていた。

2．子どもの理解者としての親の立場

家族の中に自分をわかってくれている人がいるかどうかを複数回答で尋ねたところ，いると答えた生徒が6割であった。そのうち，86.6%は母を，61.3%は父を，34%はきょうだいを，9.4%はその他の家族を理解者としてあげた（図1）。きょうだいやその他の家族をあげた生徒のほとんども，同時に，父，母いずれかを答えていることから，家族内では，親が子どもにとって一番の理解者となっているといえる。一方，家族には，「自分をわかってくれている人」はいないと答えた生徒が約4割いた。

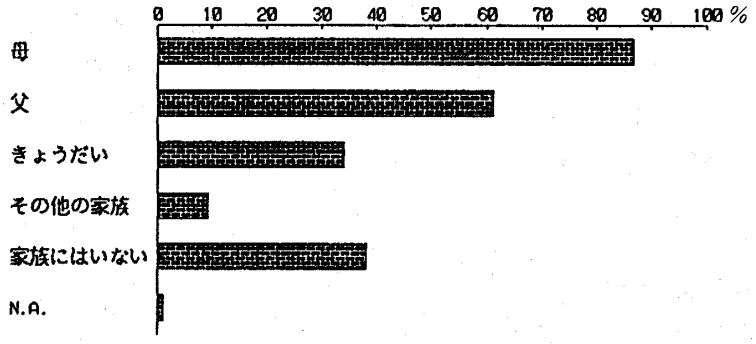

図1 自分をわかってくれている人（複数回答）

きょうだいの人数との関係をみると，きょうだいのいないほうが父を理解者とする割合が高く，きょうだいの人数が増えると，父を理解者とする割合は少なくなり，母をあげる割合が高くなる傾向があった。また，二人きょうだいよりも三人以上のきょうだいがいる場合のほうが，きょうだいを理解者としてあげる割合が高かった。

家族構成別では，核家族，拡大家族とも母を理解者にあげる割合は高い。しかし，拡大家族のすべての生徒が母を理解者としていて，核家族の生徒より高い割合を示しているが，父を理解者とする割合は核家族の生徒のほうが高い。これは，1％水準で有意差が認められた。

3．子どもの望む親子のコミュニケーションのとり方

次に，親子が相互に理解し合うために，子どもは親とどの程度コミュニケーションをとりたいと望んでいるか尋ねたところ，「毎日短時間でも」コミュニケーションをとりたいと答えたのが25.3％で最も多く，次いで「毎日なるべく長い時間」コミュニケーションしたいが22.9％を占めた。また，「気が向いたとき」が20％，「特に必要なし」が19.4％であった(図2)。つまり，親子の相互理解のために，約半数の生徒は毎日コミュニケーションをとることが望ましいと考えているが，約4割の生徒は日常の親子のコミュニケーションが重要であるとは考えていないようである。

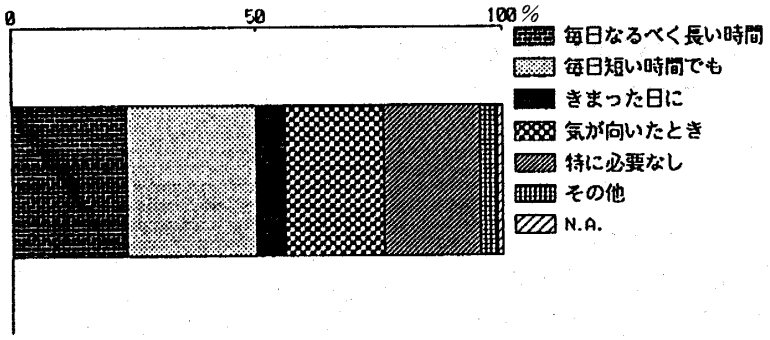

図2　子どもの望む親子のコミュニケーションの程度

これを理解者との関係でみると，父，母いずれかの親を理解者として答えた生徒の62.9％が「毎日短時間でも」，「毎日なるべく長い時間」のいずれかを望んでいる。親を理解者としてとらえている生徒は，親子の相互理解のために，親とのコミュニケーションを必要であると考えているようである。一方，親だけでなく家族内には理解者がいないと答えた生徒では毎日のコミュニケーションを望むものは3割に満たず，過半数が「気が向いたとき」，「特に必要なし」と答えている。ここには，親に反抗的な思春期の特徴が表れている。

4．親子のコミュニケーションの実態

では，実際にはどのような親子のコミュニケーションが行われているのだろうか。ここでは，親子のコミュニケーションを「挨拶」「共有行動」「話し合い」でとらえることにした。共有行動ついては1986年の厚生省児童家庭局の「児童環境調査」を，話し合いについ

ては総務庁青少年対策本部の「青少年の連帯感などに関する調査」[3] を参考にし，質問紙を作成した。

まず，挨拶については，起床時の「おはよう」，就寝時の「おやすみ」，外出時の「いってきます」または「いってらっしゃい」，帰宅時の「ただいま」または「おかえり」のそれぞれについて，「いつも言う」か，「ときどき言う」か，「ほとんど言わない」かを尋ねた。起床の挨拶を毎朝するのは，父とでは37.6%，母とでは68.8%，就寝の挨拶を毎晩するのは，父とでは41.2%，母とでは76.8%，外出の挨拶を毎日するのは，父とでは34.7%，母とでは82.4%，帰宅時の挨拶を毎日するのは，父とでは39.4%，母とでは76.5%であった（図3）。母子間でかわす挨拶のほうが父子間よりも約2倍多くなっている。挨拶でみる限り，父子間のコミュニケーションは，母子間に比べて半数近く少ないという傾向がみられる。

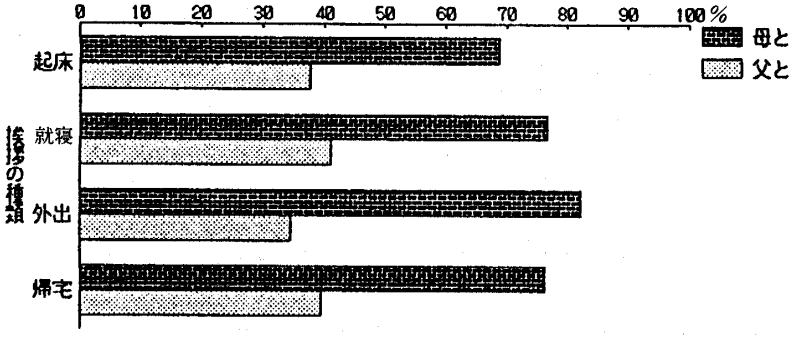

図3　母子間・父子間でいつもする挨拶

共有行動については，図4にあげた15項目のそれぞれについて一緒にする家族を尋ねた。父母と子の間で最もよく行われているのが「外食」で，次が「旅行・ハイキング」であった。夕食は3位にきているものの40.6%に下がり，朝食は15.3%で7位であった。このことから，毎日の生活では，父，母，子の三者がそろうことは少なく，非日常的な家庭外での行動が，父，母，子がそろうコミュニケーションの機会になっていると考えられる。母子間と父子間の比較では（図4），母子間で最もよく行われているのが「夕食」で90%であるのに対し，父子間では「夕食」が40.6%で3位にきていること，また，母子間では「その日の話しをする」が4位，「買い物」が5位であるが，父子間ではそれぞれ9位，10位に下がっている。このことから，共有行動によるコミュニケーションは，母子間のほうが父子間よりも日常の家庭生活に関わるものが多いといえる。

話し合いについては，「よく話す」が母とでは50%，父とでは20%を占める。また，「よく話す」と「まあ話すほうだ」を合わせ，「あまり話さない」と「ほとんど話さない」を合わせると，母とでは「話す」が9割を越えるが，父とでは「話す」が62.4%で，「話さない」が34.7%を占め，父と話すことが母と比べてかなり少ないことが分かる（図5）。そこで，父と話さない理由についてみてみると，「親が忙しいから」が最も高い割合で約4割，「親が疲れているから」14%となっていて，忙しい父親像が伺える。また，「自分が親と話す気

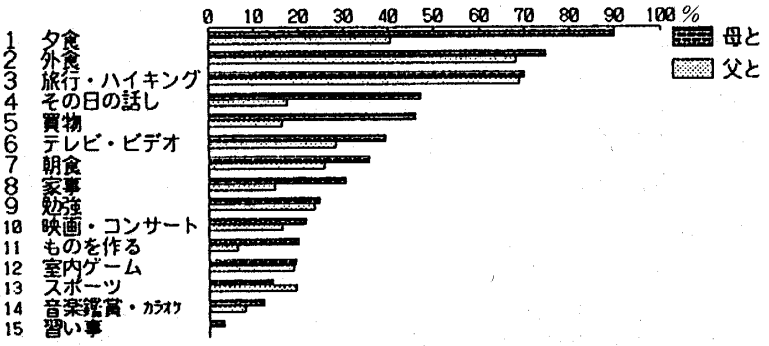

図4　母子間・父子間の共有行動（複数回答）

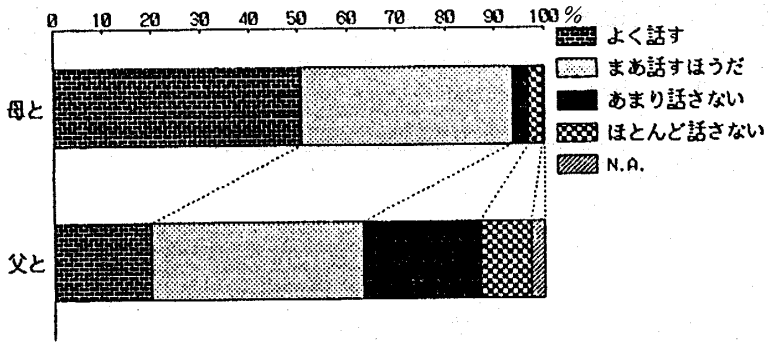

図5　母子間・父子間の話し合い

になれないから」や「親には特に話すことがないから」もそれぞれ23.4%，20.3%を占め，親に対して反抗的な思春期の特徴も見られる。

以上のようにコミュニケーションを，挨拶，共有行動，話し合いからみると，子どもは母とのほうが父とよりもコミュニケーションをよくしていることがわかる。

5．親子のコミュニケーションに影響を及ぼす要因

次に，何が，このようなコミュニケーションに影響を及ぼしているのかを探るために，挨拶，共有行動，話し合いの3つのコミュニケーションの程度を，性別，家族構成，きょうだいの人数，父の帰宅時間，母の職業の有無，子どもが週に習い事・塾に通う日数との関係で考察した。

挨拶については，それぞれの挨拶をする程度を次のように点数化して考察した。すなわち，「いつも言う」を2点，「ときどき言う」を1点，「あまり言わない」を0点とし，0～2.66点を低位群，2.67～5.33点を中位群，5.34～8.00点を高位群として，3つのグループに分けた。

父との挨拶の程度によるグループ分けでは，高位群が38.8%，中位群が34.7%，低位群が20.6%となった。これを母との挨拶の程度によるグループ分けと比べると，高位群が少なく，中位群，低位群が多い。

また，挨拶をよくしていれば，共有行動と話し合いもよくしているというように，挨拶と共有行動，話し合いとの間にそれぞれ相関関係がみられた。

1）性　別

図6では，父との挨拶は，男子の方が女子より高位群の占める割合が高く，女子の方が中位群と低位群を合わせた割合が高くなっている。つまり，女子の方が男子より父とのコミュニケーションが少ないということがわかる。一方，母との挨拶は，女子の方が男子より高位群の占める割合が高くなっている。特に，起床，就寝，外出時の母との挨拶においては，5％水準で有意差が認められた。

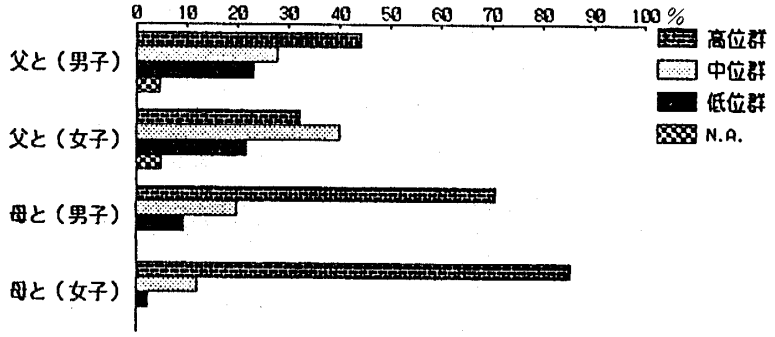

図6　父母との挨拶 ―性別―

共有行動については，父との共有行動は男子の方が，母との共有行動は女子の方が多く行っている。各共有行動についてみると，父とでは男子の方が女子より多く行っているのは，「朝食を食べる」「夕食を食べる」「家事をする」「勉強をする」「テレビ・ビデオを見る」「ものを作る」「スポーツをする」で，15項目中7項目であった。これら7項目は，母とでは，女子の方が男子より多く行っている。特に，「家事をする」「ものを作る」では5％水準で有意差が認められた。残り8項目のうち「習い事をする」を除いた7項目については，父とも母とも，女子の方が男子より一緒に行う割合が高い。

話し合いについては，挨拶，共有行動と同様に，父とでは男子の方が，母とでは女子のほうが「よく話す」「まあ話すほうだ」と答えた割合が高い。母との話し合いでは5％水準で有意差が認められた。

このように，性別では，同性の親との方がコミュニケーションをよくとっているが，異性の親とは少ない傾向がみられる。特に，母との関係では，どのコミュニケーションにおいても，性別による有意差が認められた項目が多いことから，母と女子との関係が密接であると考えられる。

2）家族構成別

父との挨拶は，核家族の方が拡大家族よりも高位群の占める割合が高く，拡大家族の方が中位群，低位群の割合が高くなっている。母との挨拶においても，核家族の方が拡大家族よりも高位群の占める割合が高く，1％水準で有意差が認められた（図7）。

共有行動については，父とにおいても，母とにおいても，核家族の方が拡大家族より一緒に行っている割合が高い。各共有行動についてみると，「朝食を食べる」「夕食を食べる」「家事をする」「テレビ・ビデオを見る」「外食をする」「買物にいく」「旅行・ハイキングに

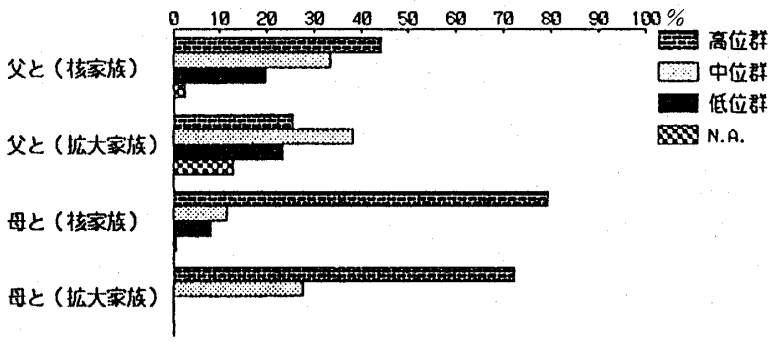

図7　父母との挨拶 ―家族構成別―

いく」では，0.1%水準で，「室内ゲームをする」では1%水準で有意差が認められた。

話し合いについては，父とでは，核家族の方が拡大家族よりも「よく話す」「まあ話す方だ」の占める割合が高いが，母とでは，核家族も拡大家族も9割以上が「よく話す」「まあ話す方だ」と答えている。

このように，挨拶，共有行動においては，父子間，母子間ともに，話し合いについては，父子間において，核家族の方が拡大家族よりもよく行っているようである。これらのことから，家族構成別では，核家族は，拡大家族に比べて，親子のコミュニケーションをよく行っているという傾向がみられた。ただし拡大家族では，その分その他の家族とのコミュニケーションが行われていて，家族内のコミュニケーション自体は核家族よりも多い。

3）きょうだいの人数別

きょうだいがいる場合といない場合では，父，母どちらとの挨拶においても，きょうだいがいない場合の方が高位群の割合が高く，いる場合の方が中位群，低位群の割合が高い(図8)。また，きょうだいが多いほど，父，母どちらとの挨拶も，高位群の占める割合が低くなり，中位群，低位群の割合が高くなる。

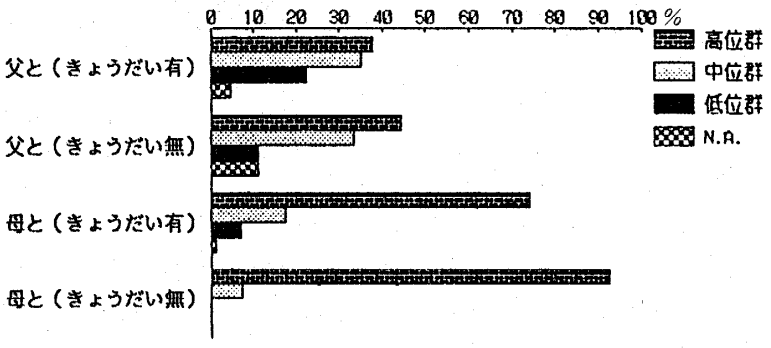

図8　父母との挨拶 ―きょうだいの有無別―

共有行動においては，きょうだいのいる場合といない場合では，「朝食を食べる」「夕食を食べる」「テレビ・ビデオを見る」「室内ゲームをする」「外食をする」「旅行・ハイキングにいく」が0.1%水準で，「ものを作る」「買物にいく」が1%水準で，「その日の話しをする」「勉強する」「スポーツをする」が5%水準で有意差が認められ，いない場合の方が父とも母とも一緒に行動する傾向がある。また，きょうだいの人数が増えると父子間，母子間ともに，共有行動を行う割合が低くなる傾向がみられ，「朝食を食べる」「夕食を食べる」「テレビ・ビデオを見る」「外食をする」「旅行・ハイキングにいく」では0.1%水準で，「室内ゲームをする」では1%水準で，「ものを作る」「買物にいく」では5%水準で有意差が認められた。なお，きょうだいが多くなるほど，きょうだいとの共有行動が多くなる傾向がある。

話し合いでは，きょうだいがいない場合の方が，また，きょうだいが少ないほど，「よく話す」割合が父子間，母子間ともに高い。

このように，きょうだいの人数別では，きょうだいがいるほうが，また，きょうだいが増えるほど，父子間，母子間ともにコミュニケーションが少なくなる傾向がある。その分，きょうだいとのコミュニケーションが多くなると考えられる。一人っ子の場合，父母がきょうだいの役割をも担っていると考えられる。

4）父の帰宅時間別

父との挨拶においては，父の帰宅時間が早いほど高位群の占める割合が高く，帰宅時間が遅いほど低位群が高くなっていて，0.1%水準で有意差が認められた（図9）。

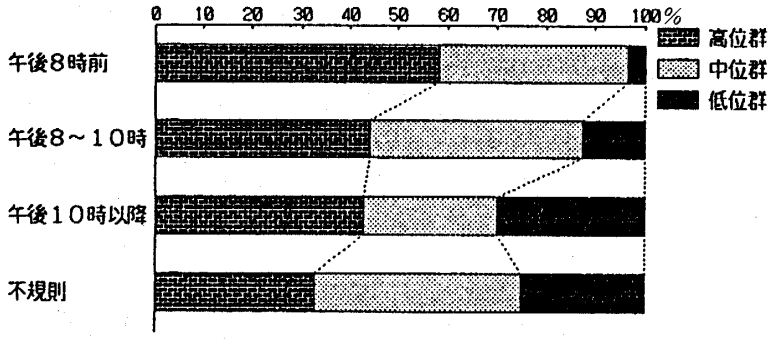

図9　父との挨拶 ―父の帰宅時間別―

共有行動については，「朝食を食べる」「夕食を食べる」「家事をする」「その日の話しをする」「勉強をする」「室内ゲームをする」「スポーツをする」において，父の帰宅時間が午後8時前の父子間で一緒に行う割合が高いが，「テレビ・ビデオを見る」「ものを作る」「旅行・ハイキングにいく」「映画・コンサートにいく」においては，父の帰宅時間が午後8時以降の父子間で一緒にする割合が高い。父の帰宅時間により父子間の共有行動のとり方に違いがあるようである。帰宅時間の遅い父親は，日常生活でコミュニケーションがとれない分，工夫してコミュニケーションをとっている様子がうかがえる。

話し合いについては，「よく話す」が，父の帰宅時間が午後8時前の父子間で高い割合を

示している。

これらのことから，父の帰宅時間が遅いことによって，父子間のコミュニケーションが少ない傾向があるといえる。

5）母の職業の有無別

母の職業の有無別による母との挨拶において，母が常勤の母子間で高位群が半数近くを占めるとはいえ，母がパート勤務，その他，無職に比べると，低い割合となっている（図10)。起床，就寝，帰宅の各々挨拶を毎日言うのは母が常勤の母子間では約5割だが，母がパート勤務，その他，無職の母子間では約7～8割である。外出の挨拶については母の職業に関わらず約7～8割の母子間で毎日行っている。

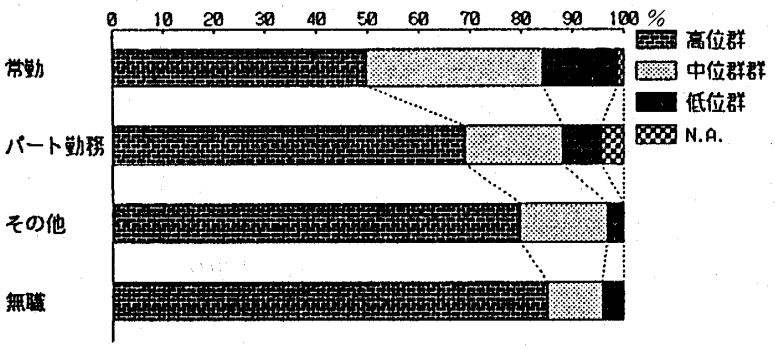

図10　母との挨拶 ―母の職業別―

共有行動については，「朝食を食べる」では，常勤の母子間で約6割であるのに対し，パート勤務，その他，無職で約3割である。「夕食を食べる」では，母の職業に関わらず約9割以上の母子間で行われている。パート勤務の母子間では，他の職業の母子間と比べて，「テレビ・ビデオを見る」「家事をする」「その日の話しをする」「買物をする」「旅行・ハイキングをする」「映画・コンサートにいく」において高い割合を示す。「室内ゲームをする」では常勤の母子間で33.3%を占め，最も高い。「外食をする」「家事をする」「テレビ・ビデオを見る」では常勤と無職が似た傾向を示した。「その日の話しをする」「ものを作る」では無職の母子間で高い割合を示した。

話し合いでは，母の職業に関わらず，約5～6割の母子間で「よく話す」ということで，「まあ話すほうだ」を加えると9割以上が「話す」と答えている。また，母の職業別による父子間の話し合いに有意差が認められ，「よく話す」の割合は，母がパート勤務の父子間で40%と最も高く，次いで母が常勤の父子間である。いずれにしても母が職業を持っている場合の方が父子間のコミュニケーションがとれているといえる。

これらのことから，母の職業の有無は，母子間のコミュニケーションに影響を及ぼしているだけでなく，父子間のコミュニケーションにも影響を及ぼしていると考えられる。

6）子どもが週に習い事・塾へ通う日数別

父との挨拶において，子どもが週に習い事・塾へ通う日数が多くなるほど高位群の占める割合が低くなる。母との挨拶と子どもが週に習い事・塾へ通う日数との関係では，特に

傾向はみられなかった。

共有行動では，「家事をする」「音楽を聞く」「ものを作る」において，子どもが全く習い事・塾に通っていない父子間，母子間で共に最も高い割合を示した。反対に，「朝食を食べる」「テレビ・ビデオを見る」では，子どもが週に5日以上習い事・塾へ通っている父子間，母子間で最も高い割合を示した。「その日の話しをする」では，父子間に違いはみられなかったが，母子間では，子どもの習い事・塾へ通う日数が増えるにつれて割合が低くなる傾向があった。子どもの忙しさにより，共有行動のとり方が違ってくると考えられる。

話し合いにおいては，父子間では子どもが週に習い事・塾へ通う日数が増えると「話す」と答える割合が低くなる。母子間では特に傾向はみられなかった。

これらのことから，習い事や塾へ通うことによる子どもの忙しさが父子間のコミュニケーションを少なくしていると考えられる。

6．コミュニケーションと親子関係

以上の結果から，全般的に，母子間のコミュニケーションは他から影響を受けることは少なく，よく行われているが，父子間のコミュニケーションはいくつかの要因により少なくなっていることが明らかになった。

そこで，父子間の挨拶を例にとり，子どもの理解者としての父との関係をみてみると(図11)，父との挨拶頻度の高位群ほど父をあげる割合が高くなっている。つまり，父と挨拶をよくしているほど，父を自分の理解者としてとらえているようである。しかし，高位群とはいえ，4割以上が父を理解者にあげていないことから，挨拶さえしていれば父子間の相互理解が図れるとは言えないことがうかがえる。

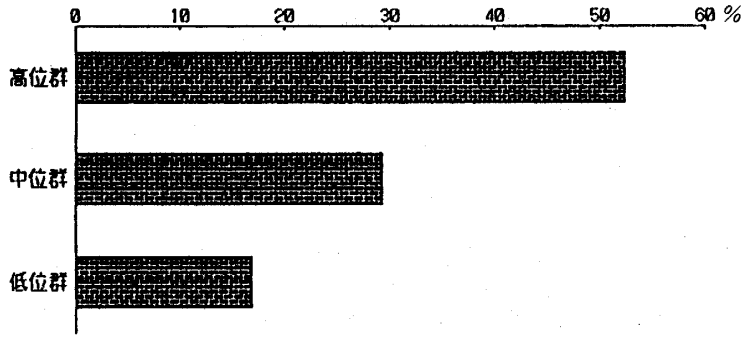

図11　父との挨拶頻度別父が理解者である割合

また，父との挨拶と子どもが望むコミュニケーションの程度との関係を見ると（図12)，高位群ほど，「毎日なるべく長く」，「毎日短い時間でも」と答える割合が高く，低位群ほど「気が向いたとき」，「特に必要なし」と答える割合が高くなる。つまり，父と挨拶をしているほど毎日親とコミュニケーションをとることを望んでいて，父と挨拶をしていないほど毎日のコミュニケーションが重要であるとは考えていないようである。

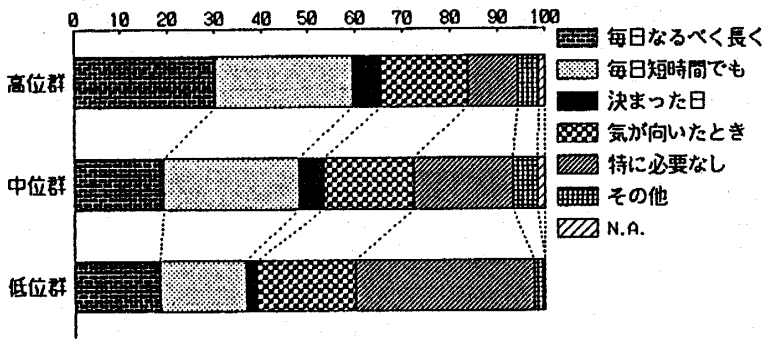

図12　父との挨拶頻度別子どもの望む親子のコミュニケーションの程度

要　約

本調査で，「家庭生活」領域を履修することになっている中学1年生の親とのコミュニケーションの実態と背景を探ったところ次のような結果が得られた。

1．6割以上の生徒は，親を理解者としている。そして，父親よりも，母親を理解者としてとらえている。一方，約4割の生徒は，親を理解者ととらえていない。

2．約半数の生徒は親と毎日コミュニケーションをとることを望ましいと考えているが，約4割の生徒は日常の親子のコミュニケーションに対して消極的である。

3．実際のコミュニケーションについて，挨拶，共有行動，話し合いからみてみると，父親よりも，母親とコミュニケーションをよくとっていることが明らかになった。

4．コミュニケーションのとり方には，性別，家族構成，きょうだいの人数，父の帰宅時間，母の職業の有無，子どもが週に習い事・塾へ通う日数，コミュニケーションに対する意識などが影響していることがわかった。

以上の結果から，「家庭生活」領域における「家族関係」の扱い方を考えると，次の2つのポイントがあると思われる。

第1は，第二次性徴期にいる中学生に，家族の題材を積極的に取り上げてみてはどうかということである。というのは，約4割の生徒は親を理解者としてとらえていない，また，約4割が親子のコミュニケーションは気が向いたときとればよい，特に必要ない，と考えているという結果が得られたが，それは，第二次性徴期に入った中学生が，親に反抗しつつ自立していこうとする姿のあらわれではないかと考えられる。だからといって，この段階の生徒に親子関係についての学習をさせることは難しいので題材設定をしないというのではなく，むしろ積極的に取り上げて，生徒自身に自分が第二次性徴期にいることを自覚させるとともに，そのような自分と親との関係が客観的にとらえられることこそ大人への第一歩であるということを考えさせてみてはどうだろうか。

第2は，コミュニケーションのあり方は，現代社会に生きる家族員それぞれの生活や意識が一つの重要な要因となっていることが明らかになったことから，生徒が中学生という自分の発達段階や現代の家族の抱える問題を客観的にとらえられるようになることが必要であると考えられる。特に父子関係が母子関係より希薄になる要因に焦点を当てることに

よって，社会的な問題をとらえることができるだろう。それらを通して，自分にとって家族とは何か，家族と自分にとってのよりよい家族関係とは，ということを主体的に考える学習過程にしていけるのではないかと思われる。

終わりに，本調査にご協力下さいました，横浜国立大学附属鎌倉中学校の1990年度の1年生の皆さん，および家庭科の中野恵子先生はじめ諸先生に心から感謝いたします。

注)

1）たとえば，中沢美智代「中学校分科会の成果と課題」『月刊　家庭科研究』No.71，1990年11月，p.49

2）総務庁統計局『平成2年　国勢調査報告　第2巻　第1次基本集計結果　その2　都道府県・市区町村編　14　神奈川県』より

3）総務庁青少年対策本部編『現代の青少年—第4回青少年の連帯感などに関する調査—』1986年，p.23，p.27